ビア語が書かれていた。しかしアビセンナ、アベロエスなどのラテン名はそのまま使われ、発表ではバフティシュー、マサワイヒなどの名も聞かれた。チュニジアに最初にアラブ医学を移植したのはマサワイヒであったという。医学者の中ではアビセンナが高く評価され、エッザハラーウイ（アルブカシス）も重視されていた。

国際学会の一面は、他の国々の研究者との交流にある。私自身、シンコーナの研究でたびたび引用した論文の著者ゲラ教授（スペイン）に会うことができたし、ヘブライ大学のコテック教授にマイモニデスのことを質問して、きびしいが有益な教示を得ることができた。

会場に出店していた書店でアラブ医学・科学史の二、三を入手したが、アラブ医学史の古典はなかった。店員に聞いたところ、左記の照会先を教えてくれた。ここでは、アラビア語だけでなく、フランス語で書かれた現代医学のシリーズなども出版している。

ARAB CENTRE FOR MEDICAL LITERATURE
P. O. Box 5225, 13053 Safat, KUWAIT

学会が終わった翌日、一人で古都カイルワンを訪れた。有名なモスクの二、三を見ただけだったが、郊外にあるイスラム博物館で、羊皮紙に書かれた古いコーランの手稿を初めて見て感激した。

（泉　彪之助）

「宗田文庫披露式」報告

本学会の常任理事にあられた故・宗田一先生のご蔵書が、京都の文部省大学共同利用機関・国際日本文化研究センターに一括して寄贈され、その宗田文庫披露式が同センターにて一九九八年九月二十五日に行われた。

宗田先生は一九八九年から同センターの共同研究員として九六年七月に亡くなられるまで研究活動を続けられ、生前より将来は蔵書を同センターに寄贈して広く公開利用されることを希望されていた。その遺志により、ご遺族が自宅にあった蔵書類の寄贈を申し出、受け取った同センターは松田清客員教授（京都大学教授）を中心に蔵書の調査を開始し、本年九月に同センター編刊の『宗田文庫仮目録』五八五頁を完成させた。

寄贈されたのは書籍一万三千百七冊、画像資料・古地図など三百六十六点など。室町期の古医書写本から明治期の洋装本、また各種文書・一枚刷・雑誌類などがある。分野も漢方・蘭学・洋学ほか、およそ日本の医薬を中心とした医事文化の全分野におよび、宗田先生の学問の深さと広さを反映していた。

当日の披露式には同センター関係者のほか、本学会や洋学史学会など各界からの出席者があった。ご遺族から寄贈目録が河合隼雄同センター所長に手渡され、ご遺族の挨拶と各代表の祝辞の後、同文庫の調査整理にあたられた松田清教授よ

り「宗田文庫について」と題した記念講演がなされた。

当講演では寄贈の経緯および文庫の概要が説明され、同文庫の特色を次の三点に要約している。

1　広い意味での薬を中心とした、十五世紀から現代まで五百年にわたる日本医療文化史の一大宝庫。

2　一次資料を中心として、研究ノート・研究書・雑誌が同心円状に見事に構成されており、しかも一冊一冊、一点一点に先生の目が入っている。実証的な厳しい学風を自らに課した学者の蔵書として、まさに「文庫」として後世に伝えるに価する。

3　宗田資料（和本コピー・論文抜き刷り・ノート類）は研究資料として、後進の研究者に多大の利便を供する。

当講演のあと宗田文庫貴重品の展示と解説、また同センター図書館に設置された宗田文庫の回覧などが行われた。なお同文庫の目録は仮目録のため印刷部数が少なく、当日の参加者に配布されたのみで、一般への販売・配布はされない。

しかし宗田先生のご蔵書はこうして国有財産となったため、今後は同センターを訪れれば誰でも公開利用できるようになった。本学会にとっても一大慶事であり、学会各位が広く利用されるなら、宗田先生も地下でさぞや慶ばれることであろう。

（真柳　誠）

❋❋❋ 紹　介 ❋❋❋

荒井保男著『続・医の名言』

荒井保男著『医の名言』が約三年前に発刊され、私も本誌第四十二巻第一号に書評を書いておいた。今回その続編が上梓されたので紹介する。

続編も前編を踏襲して、三十五項目の人物または記事が搭載されている。史記、ヒポクラテス、医心方、曲直瀬道三、シモンズは例外として前、続両編ともに記載されているが、全く別の視点から書かれているので新鮮味がある。

著者自らが両者の「あとがき」に述べている通り、「医の名言」は先人の苦闘と苦悩の間から生まれたものだけに、味わえば味わうほど教えられることが多い。いわばこれが本書の心臓部、すなわち珠玉である。名言には古語が多いので、著書はルビを付して、詳しい注釈を加え読者の理解を便にしている。

『黄帝内経素問』には「聖人はすでに病みたるを治せず、未だ病まざるを治す」という名言があるが、これこそ医学の根本であり、現代の予防医学の思想である。

『医心方』発刊の数奇な運命が記されている。「医の名言」として『医心方』の白眉である十二の少を行うことが養生の